

商いの新しいものさし

第74回

(株)商い創造研究所
代表取締役
松本 大地

公共公園が交響公園に変貌したフライアント・パーク

ニューヨークのタイムズスクエアとグランドセントラル駅の中間に位置するフライアント・パーク。広々とした芝生、樹木、草花が植えられた約4万坪の公園にはニューヨーク公共図書館があり、オフィス街に囲まれたニューヨークの憩いの場である。園内には常設のメリーゴーランドやレストラン、カフェ、ギフトショップもあり、頻りにマーケットや屋外映画鑑賞会、ヨガの講習などのイベントが行われる。10月末から正月までは賑やかなホリデーマーケット。3月初旬まではアイススケートリンクに多くの市民が集う。スケート靴のレンタル料は20ドルだが、靴を持参すれば無料で滑走できる。公園の所有はニューヨーク市だが、公園マネジメントの営業権を民間に一定期間売却するコンセッション方式を導入した。民間企業がスケートリンクやカフェなどで事業やプロモーションをし、市は家賃収入を得て公園維持管理費に活用する。公共性と商業性が両立したことで、より良い市民サービスが提供された好事例である。

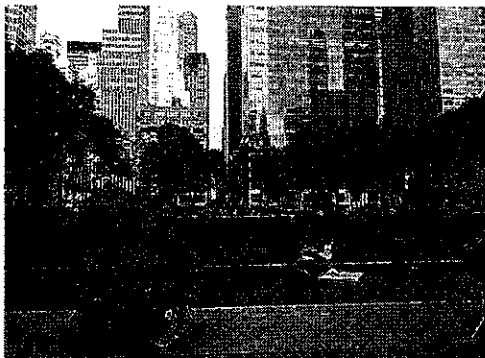
フライアント・パークの歴史は古く、1843年に開園した。その後、1970年代はベトナム戦争で荒廃した米国を表すように、公園が面する42ストリートには成人向けのショップ、公園は麻薬患者、売春婦、ホームレスの溜まり場となっていた。80年に入ると市は落書きの消去、駐車違反やスリといった軽微な違反や犯罪を徹底的に取り締まり、42ストリートの健全化を進めた。すると、フライアント・パークには自然に人が集まり、交流が進む魅力的な公共空間としての場所性が高まり、都市の居場所をさぐってくるかというブレイスマイキングへとつながった。安心して佇む、運動をする、お茶を飲む、恋人と語り合う、図書館で借りた本を読む、イベントで賑つ、ベンチではなく自由に移動できるイスと、人と社会をつなぐソーシャルパークになったのである。そして長い間閉鎖されていた公衆トイレ

の設備を一新して使用を再開した。実はこのトイレの存在こそがフライアント・パークがどれだけ市民に愛されているかを物語っている。

公園の運営は市より委託されたNPO法人のフライアント・パークコーポレーションが行い、トイレ管理もNPOの管轄である。従来のトイレは犯罪に使われたことが多々あり、長年閉鎖されていたのもその理由によるもの。しかし、現在はこの魔法のようなトイレの存在を知った人がわざわざ見学に訪れるようになった。入り口には常にホテルのロビーに置かれるような花を生けた大きな壺があり、心と体を映す鏡がある。街に対する誇りや愛情で飾られた生花、いつもヒカヒカなトイレットペーパーが、清潔な空間を演出している。トイレは、ニューヨークが優しい街になっていった証左である。

昨年、ニューヨーク視察の際、早起きしてトイレの清掃作業を見に行った。清掃担当者は契約先のルキヤビタル(社会関係資本)が醸成されてきた。

れる花の管理や、どのような器具でトイレを清掃するかを誇らしげに見せてくれた。公園を利用する人々が自分自身も街を構成する一員であるという自覚し、その場所をよい場所にするためにごみを持ち帰る、元の場所にイスを戻すといった何らかの形で関わっていく当事者意識が高まった。そこから社会・地域における人々の信頼関係や結びつき、規範というソーシャルキャピタル(社会関係資本)が醸成されてきた。



交わって響き合う交響公園



生花と鏡が出迎えるフライアント・パークのトイレ

目には見えないその力こそがグランドセントラル駅、フライアント・パーク、図書館の公共空間を、交わって響き合う交響空間に変えていった。

公園は起業で成功するチャンスのある場所でもある。日本にも上陸したシャックは2001年ニューヨークのマディソンスクエアパークでのアートイベントに1台のホットドッグカートで出店、04年に常設店舗となり、その後は破竹の勢いで米国だけでなく英国やモスクワ、日本などにも展開、15年にはニューヨーク証券取引所に上場した。日本でも全国にある公園をもっと開かれた公園マネジメントで、休む場所だった公園を再解釈し、公園でくつろぎながら楽しく過ごせるソーシャルパークにするにはどうしたらいいかを考える。次々と商いの新しい切り口が浮かんでくる。大都会ニューヨークの交響公園トイレには素敵なものがあった。